研究課題	ウクライナ避難民から学ぶ これからの世界
副題	日台豪比「国際平和共同学習」
キーワード	平和学習　国際交流
学校　/　団体名	河内長野市立天野小学校
所在地	〒586-0087 大阪府河内長野市下里町 365
ホームページ	kawachinagano.ed.jpwww.kawachinagano.ed.jp/amanosho

１．研究の背景

本校では、英語教育を １０年以上前から積極的に取り組んできた。その中で、訪日外国人旅行者とのコミュニケーションを課外活動授業に取り入れている。幸い、学校近くに有名な古刹の寺院が多くあり海外からたくさんの見学者が来られる。その方々へ英語で案内活動を行っている。ただこの３年ほど、コロナ関係でこのような活動が難しくなった。そのため、最近では海外とつないだオンライン遠隔授業に力を入れている。昨年は JICA ご支援でルワンダとつないだ遠隔授業。さらに、豪ベガ高校日本語クラス等と日豪語学協働学習も数回行なった。また１０月２１日にウクライナから避難民であるドニプロ小学校のナターシャ先生から Zoom で遠隔授業を受ける機会に恵まれた。そこには本校５年生と６年生が参加した。流暢な英語で、パワーポイント資料も提示していただき、とても分かりやすく、胸を打つ授業だった。その後、１２月９日に河内長野市に来られる機会があり、本校にも来ていただいた。玄関で高学年子どもたちがウクライナ国旗を持ってお迎えし、英語で楽しい会話交流をさせていただいた。さらに、１年生から４年生まで教室を回っていただき、親しく交流していただいた。この交流を来年度、さらに海外交流校と一緒に発展させたいと願っている。

２．研究の目的

ウクライナでの戦争、まだコロナ禍が治まり切れない世界に大きな衝撃を走らせた。武力による他国への侵略といった悲劇が、今また起きた。この現実をどのように子どもたちに教えればいいのか。平和教育の在り方、今まで通りでいいのか。そんな思いが本研究の動機である。現実の国際平和を学ぶ上で、これまでのような日本の価値観だけでは、独善的な平和主義になる。多くの国の実情を知り、相互理解が不可欠である。

そこで交流経験のあるオーストラリアそして台湾やフィリピンの学校との共同平和学習を計画した。戦争当事国だけの問題ではない。世界経済や食料問題、さらに難民問題など様々な影響が世界中で起こる。現にウクライナ難民の方は欧州だけでなく世界中に避難されている。当時大阪にも 150 人以上の方が避難されていた。その中にドニプロからお母さんと一緒に大阪市内に避難されてきた小学校英語のナターシャ先生との知己を得た。その方のリアルな声を、生の教材として海外の交流校と一緒に学びたいと考えている。これからの世界に確かな平和を構築するために、必要な手だてを海外の子どもたちと共に模索する。そんな交流授業を通して新しい平和教育に挑戦したいと考えている。

３．研究の経過

時期	取り組み内容
４月	本研究に関わる備品の購入。 テレビ会議専用のタブレット端末等。
５月	台湾・オーストラリア・フィリピンの担当教員、および通訳支援の方々との情報交換。 ナターシャ先生による遠隔授業の実施計画作成。 各国の学校の都合に合わせて調整、実施。
６月	土曜参観日に行なう小学校６年生との授業打合せ。 通訳支援依頼。打合せ・当日等の通訳支援。 ナターシャ先生による PTA、保護者、地域の方向けの講演会。
７月	３つの共同学習テーマについて、各国に連絡し可能な範囲で事前学習を依頼。 ①平和を守るための国連の機能を高める手だて。 ②人類滅亡を招く核兵器の廃絶への手だて。 ③戦争を引き起こす意図された偽りの情報(プロパガンダ)に負けない手だて。
９月	オーストラリアのベガ高校との平和共同学習授業 「戦争を引き起こす意図された偽りの情報(プロパガンダ)に負けない手だて」にそって、相互で意見の発表と質問。
１０月	フィリピンのアンジェリカム小学校と平和共同学習授業 「平和を守るための国連の機能を高める手だて」 にそって、相互で意見の発表と質問。
１１月	台湾の民族国民小学校との平和共同学習授業 「人類滅亡を招く核兵器廃絶への手だて」 にそって、相互で意見の発表と質問。 河内長野市国際交流協会「世界ごった煮」研究成果展示。
１２月	平和を願うクリスマスコンサートの実施 フィリピン　オーストラリア　台湾 ウクライナ　イギリス　フィンランド インドネシア　ネパール 計８か国で音楽交流会。 各国の音楽と平和へのメッセージの紹介。 時差の関係で、同時参加ができない国には、音楽と平和へのメッセージを入れた録画ビデオファイルを送っていただき、クリスマスコンサート終了後 Zoom で録画ファイルをこちらから送付。
２月	テーマごとに各国の児童・生徒の発表資料や記録データの共有フォルダの作成 まとめと報告書の作成と来年度以降の平和学習の資料作成。

４．代表的な実践

(1)　６月１０日に土曜参観として、ナターシャ先生と座談会形式の授業を行った。授業スタイルとしては、小学校６年生の子どもたちがナターシャ先生に自由に質問を投げかけ、その質問に答えてもらう形をとった。

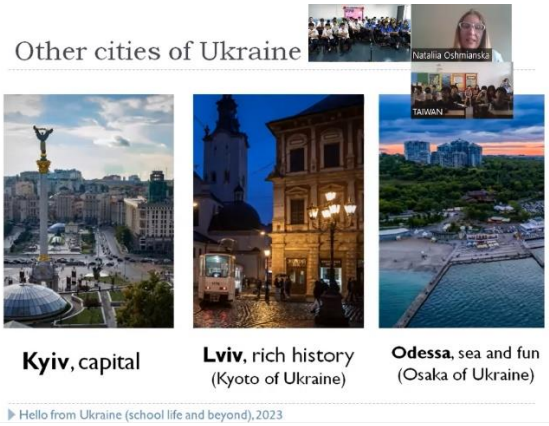
授業の前半は、アイスブレイクとして【生活や文化の違い】についての質問がでた。「日本に来て、ウクライナとの違いを感じる場面は何ですか？」「ウクライナの小学校で流行っている遊びは何ですか？」などの質問が出た。

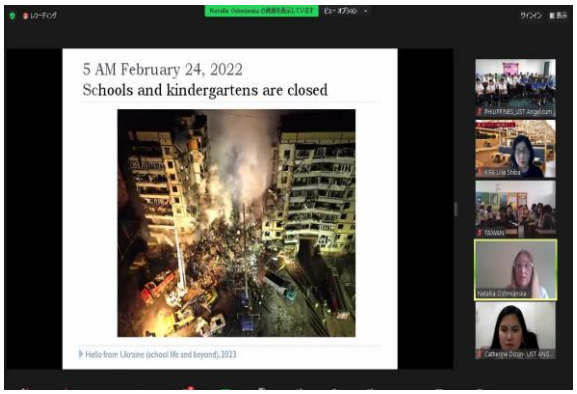
授業の後半は、ねらいとしていた【平和や戦争】についての質問が出た。「戦争が始まり、家族のみんなはどこに避難していますか。」「もし、ロシアの人々が助けを求めてきたらどうしますか？」などの質問が出た。

事前学習として、ウクライナの戦争について学習する時間や、ナターシャ先生に質問する内容を考える時間を設けたが、実際に戦争を経験している方からの話が子どもたちの興味を引いている様子だった。国際平和を学ぶ上で、今のような平和な日本の価値観だけでは、独善的な平和主義になってしまう。その国の実情を知り、相互理解が必要であることが授業を通して学べた。また、授業の中で出た意見をもとにみんなで考えを深め、これからの世界に確かな平和を構築するために、必要な手だてを子どもたちと一緒に模索する時間となった。

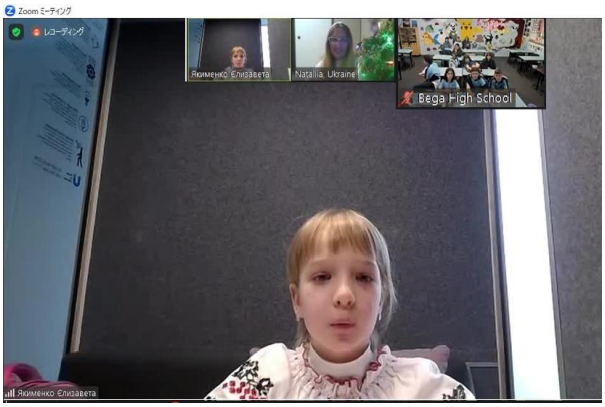
（全員がお互いの表情が見えディスカッションしやすいように椅子を配置した。）

(2) 11 月 7 日(火)日本時間の午前 11 時 25 分から台湾の交流校(高尾市立民族国民小学校 5 年生)とフィリピンの交流校(アンジェリカム小学校 6 年生)がウクライナの先生の遠隔授業を受けた。この取り組みは天野小学校の国際平和協働学習の一環として行った。いつもの授業では日本語の通訳が入るので時間がかかるが、今回は英語のみの授業となった。両国の子どもたちは、通訳なしでウクライナの先生の英語をほとんど理解していたようだ。また質問も英語でのやり取りになった。尚、司会進行は河内長野市国際交流協会(ＫＩＦＡ)の会長にしていただいた。この取り組みを録画しておき、後日、天野小学校で日本語での通訳を通して、今回のウクライナの学習に対して海外の子どもたちの質問や感想、反応から平和についての考えを共同して学ぶことができた。





(3) オーストラリアのベガ高校とは、12 月 14 日(木)にウクライナ子どもたちと音楽での交流を行い、平和への思いを共有することができた。この平和を願うクリスマスコンサートには、9 か国が参加。参加した国と学校名は次の通りだ。イギリスのアールストン小学校、フィリピンは中央フィリピン大学、インドネシアはブナブール幼稚園、キリギスはビシュケク第６９番学校、ウクライナはドニプロ市立第 98 番小学校、カナダはネタガミュウス小学校、南米からはメキシコのソモス　アミーゴスから日本語学習者のグアテマラ方 2 名がビデオ参加してくれた。そしてオーストラリアのベガ高校だ。ウクライナの子どもたちは、戦時下で学校には集まれないので、各家庭から 3 名が参加してくれた。ウクライナの女の子の歌声には、参加した 8 か国のみんなが感動した。時差の関係で天野小学校は、リアルに参加はできなかったが、後日録画を鑑賞し、平和な国際社会の大切さを痛感した。



(4) 11 月 19 日河内長野市国際交流協会「世界ごった煮」研究成果展示

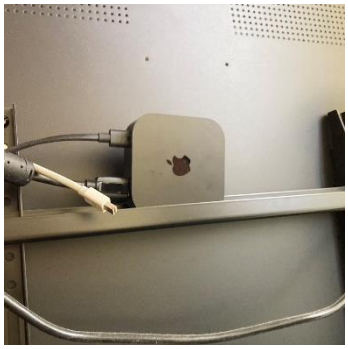
河内長野市国際交流会 KIFA 主催「世界ごった煮」にてブースを設け、様々な方々に発信することも行った。天野小学校 6 年生作成のウクライナクイズも行い来場者参加型とした。子どもから高齢者までクイズを楽しんでいただけた。交流動画視聴には多数の市民が足を止めて世界との交流に驚いていた。ナターシャさん母娘も来ていただき（お母さまは車椅子）他国ブースや色々な方にウクライナの美しさをお伝えしていた。 世界平和教育への意識を多くの方に知ってもらえるきっかけをつくることができた。

５．研究の成果

（１）助成金の活用による成果

iPad　MacBook アップル TV

海外の学校との交流を行うために活用した。インターネットや本での調べ学習も行ったが、実際に海外の方たちと話すことができた経験が一番学びにつながったように感じる。学習における資料作成や児童のスライド作成などの活動の記録用の写真や動画の撮影保存、交流のやり取りの様子や情報共有のため、そのデータの交換に重宝した。



（2）授業実践から見えた成果

今回のように多くの国と交流し、その国の子どもたちや大人たちと共同学習することを通じて、児童の意欲・関心を高めるだけでなく、「世界の実情を知る」「世界と日本を比べる」ことができた。これまでのように教科書やインターネットなどでの調べ学習だけでは、ここまでの深い学びにはつなげることができなかったはずである。自分たちにできることや、これから生きていく自分たちの未来について考えられたことが本研究の最大の成果であると考える。

（3）児童アンケートより

児童アンケートの様子からウクライナや世界の情勢について興味や関心が大きくなったと言える。この取り組みの前から、ニュースやネットで戦争についてある程度知っている児童はいたが、自分事のように感じている児童は少なかった。しかし、今回の取り組みを通して、避難民の当事者とのかかわりや、海外の子どもたちの話を直接聞いたり話したりすることで実感が深まり、より身近な問題として捉えることができるようになったと思う。

6．今後の課題・展望

（1）持続可能な取り組み

小学校での国際交流は、単発の取り組みになったり、担任が変わると活動内容が大きく変わったりすることもある。継続して同じ内容を深く学び続けることが難しいのが学校教育の課題となる。そのために、地域のメディアセンターやコミュニティと協力し、学校全体で

取り組むことができるようなプログラムにすることで、児童が主体的に学び、異文化に対する興味や理解を深める機会を作ることができると考える。

（２）機器を使った交流

これからの学習ツールとして、一人一台端末や iPad などを使った国際交流は大きな可能性があると考えている。これまでの交流は、現場に来てもらうしか方法がなく、取り組むためのハードルが高かったが、学校現場のデジタル整備も進み、海外とつながることが容易にできるようになった。海外との国際交流授業を発展させる大きな手掛かりとなり、今後も様々なテーマで利用でき、児童がより世界とのつながりを感じることができるようになったと思う。

７．おわりに

小学校でのウクライナとの交流は、異文化理解と国際的な連携を促進する良い機会となった。言語や文化の違いを感じながらも、子どもたちは一生懸命に言葉を選び、伝わる表現を考えながら活動することができていた。ウクライナのナターシャさんとの交流は、子どもたちのコミュニケーション能力の向上につながったと思う。また、機器を使っての交流は世界とのつながりを感じさせることができ、外国の文化や生活をより広い視点で学べる機会となった。この交流活動は単なる情報のやり取りを超えて、共に学び合い、共に成長する良い機会となりました。今回の取り組みをきっかけに、子どもたちがより世界とつながり、広い社会を感じることができるようにしたい。